

【短報】 イノシシ化石の骨格復元について

知念 幸子*

Short Article

Skeletal Restoration of a Fossil Wild Pig, from the Late Pleistocene Site

Sachiko CHINEN*

はじめに

沖縄県立博物館・美術館の開館するにあたり博物館常設展示室総合展示において、今まで資料不足で復元を行うことができなかったイノシシ化石の復元について行うこととなった。しかし琉球列島産出のイノシシ化石と現生種であるリュウキュウイノシシとの比較検討については、現在も研究の途中である。そこで本短報では、今回行われた骨格復元についての概要を紹介する。

復元の意義・目的

琉球列島のイノシシ化石については沖縄島、宮古島、石垣島から報告されている。しかし、10カ所からしか見つかっていないこと、且つ一個体分の化石が見つかっていないことなどから、暫定的なものとならざるを得ない。

しかし、今回復元模型を展示している「海で結ばれた人々 ～化石が語る沖縄～」(以下「サークルホール」)では、実物標本や映像を効果的に活用しながら、特に更新世頃の琉球列島について、世界的にも重要で身体的特徴を知ることができる最古の日本人「港川人」を中心に据え、同時代に生息していたヤンバルクイナ、イノシシ、リュウキュウジカやリュウキュウムカシキョンなど代表的な陸上動物も復元することで、当時の自然環境の推定や「化石の宝庫」としての琉球列島の特異性について知るための手掛かりとなるような展示とした。

イノシシについて

偶蹄目イノシシ亜目イノシシ科に分類されるイノ

シシ属の起源は、漸新世前期(約4000万年前)に遡り、新生代中期から後期にかけて多様化が進んだため多くの化石種が知られている。基本的に定冠の丘陵歯で多くの小咬頭が発達し牙状の犬歯を持っているが、各進化系列の中で歯列形態の変異が大きいため、その同定と分類は難しい。しかし現生種にみられる「雑食性、四肢が短い、指の数が多い、単純な胃を持ち反芻しない、歯列が完全である」などの特徴は、偶蹄目のなかでは最も原始的な形態を残していると考えられる森林性の動物である。

現生種のイノシシ(*Sus scrofa*)は、ヨーロッパからアジアおよびアフリカ北部にかけて広大な分布域を持ち、約30亜種に分類されている。日本にはこのうち2亜種のイノシシが生息しており、本州、四国、淡路島および九州にはニホンイノシシ(*Sus scrofa leucomystax*)が、奄美大島、加計呂麻島、請島、徳之島(絶滅の恐れのある地域個体群 LP)、沖縄島、石垣島および西表島にはリュウキュウイノシシ(*Sus scrofa riukiuanus*)が分布している。ニホンイノシシは大陸のイノシシ(アジアイノシシ系)と比較すると体長は約150cm程度で中型だが、体重が200kgを越す個体が見られるのに対し、リュウキュウイノシシは雄成獣でも体長110cm程度、体重40~60kgとかなり小型である。最近のDNA研究によるとリュウキュウイノシシは、ニホンイノシシとは形態的にも遺伝的にも異なり、近縁なのはタイ・ベトナム周辺の集団であることが明らかにされているが、外部形態や骨格などの解剖学的な形質については、十分比較検討されていない。

文献におけるリュウキュウイノシシについての最

* 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1
Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

古の記録としては、1477年『李朝実録抄』中の記述である。それ以前に生息していた根拠として貝塚出土のイノシシの存在が知られていたため、縄文時代に人為的に導入されたという説が支持されている頃もあったが、今回復元に用いたイノシシ化石の発見によって人為的導入説は否定され、大陸との陸橋時代にわたってきた動物であるという自然分布説（高井・長谷川（1971）、今泉（1973））が唱えられ、現在も支持されている。

内 容

復元に使用した化石資料は、沖縄島南部の港川フィッシャー遺跡（八重瀬町）から1967～70年代に大山盛保氏（故人：OK給油所前社長）が港川人の化石標本とともに採取した資料である。その標本を検討した結果、参考標本としてニホンイノシシ（雄成獣 体長150cm 体重不明）を使用することとし、プロポーションや姿勢など協議・検討を重ね、約1年の製作工程を経て完成した。



写真1：リュウキュウイノシシ化石



写真2：イノシシ化石骨格復元模型

謝 辞

最後に、今回の復元を行うために必要な標本を収集するにあたって、群馬県立自然史博物館、神奈川県生命の星博物館、合資会社OK給油所大山盛弘社長、松本貢氏、松本千枝子氏、石神安弘氏、中西希氏、沖縄県立八重山高等学校の御協力を、制作にあたっては株式会社パレオサイエンスの中川久雄氏、合名会社中馬工房の中馬洪治氏、運搬設置にあたっては当館非常勤職員の宮城直樹氏、琉球中央倉庫株式会社、株式会社鬼工房の出来孝夫氏、また、展示工事を行った株式会社トータルメディア開発研究所の皆さんには、細部にわたっていろいろな御協力を頂いた。

そして、琉球列島の古生物学の研究を長年にわたって行われてこられ、復元についての御教示と御尽力を頂きました群馬県立自然史博物館の長谷川善和館長、野原朝秀琉球大学名誉教授、おきなわ石の会の大城逸朗会長の御協力があってこそ今回の復元に至った。

以上関係団体・個人の方々の御協力に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 林良博. 1985. 宮古ピンザアブ洞穴産出のイノシシ化石. 沖縄県文化財調査報告書第 68 集「ピンザアブ」—ピンザアブ洞穴発掘調査報告— 沖縄県教育委員会 pp.75-78.
- 川島由次・石嶺伝実・大山盛保. 1985. ピンザアブ洞出土のイノシシと現生イノシシとの比較検討. 沖縄県文化財調査報告書第 68 集「ピンザアブ」—ピンザアブ洞穴発掘調査報告— 沖縄県教育委員会 pp.79-82.
- 高井冬二・長谷川善和. 1971. 琉球諸島の脊椎動物化石について. 1971 年地質学会総会シンポジウム資料 九州周辺海域の地質学的諸問題 日本地質学会・日本古生物学会他連合学術大会 pp.107-109.
- 今泉吉典. 1973. 琉球列島産イノシシの分類学的考察. 国立科博専報 6 号 国立科学博物館 pp.113-129.
- 小澤智生. 2006. 彼らはいつ日本に来たのだろうか. 名古屋大学理学部・大学院理学研究科 広報誌理フィロソフィア No.10 名古屋大学理学部・大学院理学研究科広報委員会 pp.4-7.